

山城・山王遺跡 (八幡地区)
さんのお
はちまん

- 1 所在地 宮城県多賀城市南宮字八幡
- 2 調査期間 一九八九年(平一)六月～一九九一年二月
- 3 発掘機関 宮城県教育委員会
- 4 調査担当者 佐藤則之・赤澤靖章・菅原弘樹・近藤和夫・
天野順陽・高橋栄一・千葉正康・三好秀樹
- 5 遺跡の種類 集落跡
- 6 遺跡の年代 弥生時代～江戸時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(仙台)

山王遺跡は、陸奥国府多賀城跡の南西に位置し、砂押川と七北田川によって形成された標高五～六mの東西に長い自然堤防上に立地する。調査は一九七八年以来、宮城県教育委員会と多賀城市教育委員会によって行なわれ、弥生時代から江戸時代にわたる多数の遺構・遺物が確認されている。特に平安時代

前半頃の多賀城南面には、東西・南北大路を基準とした方格地割が施工され、道路で仕切られた区画には道路と方向を揃えた掘立柱建物を主体とする住居や工房、倉庫、井戸などが営まれていたことが判明している。大きくみて、大路沿いの区画は上級官人の邸宅など、大路から離れた区画は階層の低い人々の居住・生産域として使われている。

今回報告する調査は、仙塩道路多賀城インター建設に伴うものである。調査の結果、方格地割を構成する北二・二a東西道路と西四・五南北道路を検出したほか、小規模な掘立柱建物を主体とした住居・井戸・溝・畑・土坑・河川などが発見された。出土遺物は土師器・須恵器、赤焼土器など在地の土器が大部分で、施釉陶器のようないろんな品は少ない。他には瓦、硯、木・鉄・土製品、漆紙文書などがある。八幡地区は方格地割上でも大路から離れた場所であり、階層の低い人々の活動の場になっていたとみられる。

木簡は、調査開始時に掘削した排水溝から一点出土した。出土地点から、平安時代前半頃の西五道路東側溝または奈良時代の河川SD一〇〇に伴うものと考えられるが、特定できない。

このほかSK二六七から墨絵のある板材(長さ(二三六)mm幅六八mm厚さ四mm)が一点出土した。SK二六七は、西五道路の最も新しい東側溝SD三八一に伴う東西六・〇m南北五・五m深さ〇・五mの広く浅い枡で、側溝の水の一時的な集水を目的としたものである。

筆の運びから墨絵とみられるが、欠損のため絵柄は不明である。人物像とすれば首筋から胸元にあたる部分と思われる。木簡以外には土師器・須恵器、赤焼土器が出土している。年代は一〇世紀前半頃である。

なお、八幡地区では漆紙文書も五点出土している。そのうち判読可能な二点の釈文を以下に掲げる。なお、出土遺構などの詳細は関係文献を参照していただきたい。

a □年廿四歳

刀カ

□自売年七□

売年六□

b 博士□□

史生嶋岐史□

a は須恵器杯に付着した歴名様文書の断簡で、ウルシ面に記載されている。b は文書末尾の署名部分の断簡である。漆器の皿に入れた漆に付着した状況を呈するが、漆器は木地が失われ、表面に塗られた漆の皮膜のみが残存する。オモテ面の記載である。

8 木簡の釈文・内容

(1)

・ □貴遣□□□□

・ □□古古□□

(160)×26×11 081

両面とも墨の残りが悪く、各々二文字が判読されるのみである。似た文字や同じ文字を繰り返しており、ともに習書の可能性がある。

9 関係文献

宮城県教育委員会『山王遺跡Ⅴ』（一九九七年）

（吉野 武〈宮城県多賀城跡調査研究所〉）



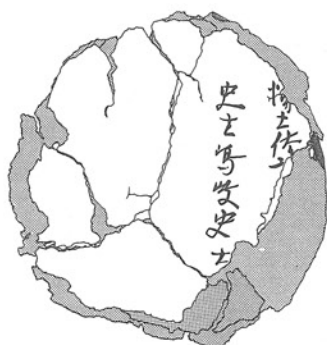
(1) 表



墨絵のある板材



漆紙文書a



漆紙文書b